

法制審議会刑事法（危険運転による死傷事犯関係）部会 第４回会議配布資料	7
--	---

第２回会議における松本参考人の説明に 対する質問と回答

第2回会議における松本参考人の説明に対する質問と回答

【質問】

第2回会議において、松本先生より、「血中アルコール濃度が同じであれば、何人であっても大体同じような作用が起こっています。ただ、外からどう見えるかという事に関しては、少し表現形としては違うということになります。」（議事録2頁）、「頭の中で起こる作用が、そのまま私たちの体の外に表現されるかということは、なかなか難しいところがあるのですが、脳の各部位の構成や神経細胞膜の構造には個人差はないため、頭の中で起こる作用というのは、血中アルコール濃度に依存して同じようなものであると御理解いただければと思います。」（議事録3頁）という御説明がありました。

「表現形としては違う」、「そのまま私たちの体の外に表現されるかということは、なかなか難しいところがある」とは、どのような意味でしょうか。

脳の中で起こる作用は、血中アルコール濃度に依存し、個人差はないが、それが外部的に現れる場合の一つである運転能力の低下の程度については、人によって異なるということにならないのでしょうか。

【回答】

血中アルコール濃度が同じであれば、アルコールが脳に与える影響の程度、すなわち酩酊症状の程度は、何人であっても同じであると考えられます。

もっとも、酩酊症状が外観上どのように現れるかは、必ずしも一定ではありません。

例えば、もともと陽気で社交的な人は、酩酊していても、その言動はあまり変わらないように感じられます。

また、アスリート等、バランス感覚や体幹が優れている方は、酩酊していても、姿勢を崩してふらつくといったことは少ないです（しかしながら、説明させていただいたようにアンチドーピングの基準値が血中で0.1 mg/mL（呼気濃度で0.05 g/L）であることは、やはり脳内に影響があることを示しています。）。

このように、血中アルコール濃度が同じであり、アルコールが脳に与える影響が同じであったとしても、人によっては、その症状が外観上現れにくく、一見してあまり酩酊していないように見えることもあります。「表現形としては違う」、「そのまま私たちの体の外に表現されるか」ということは、なかなか難しいところがある」とは、そのような意味です。

しかし、一見してあまり酩酊していないように見える場合であっても、所要の検査を行えば、酩酊症状が現れていることを確認することができます。つまり、酩酊していることが外観上現れていないように見えても、酩酊症状は確かに生じています。

特に、自動車の運転は、視覚や聴覚等により情報を得て、その情報を処理した上で、状況に応じてハンドルやブレーキ等の操作を行うという複雑な情報処理・運動能力を必要とするものであって、そのような複雑な能力に対してアルコールが与える影響の程度について、人によって差が生じるとは考えられません。

したがって、アルコールが運転能力に対して与える影響の程度は血中アルコール濃度に依存し、血中アルコール濃度が同じ数値であれば、運転能力への影響は同じであると考えられます。